



《巻頭言》

「日本植物調節剤研究協会」と私

日本缶詰検査協会理事長 相賀 幸雄

この度、(財)日本植物調節剤研究協会(以下「植調協会」という。)から「植調」に掲載する巻頭言の寄稿のご依頼を受けましたので、拙筆をも省みず、筆を執ることにしました。誌面を汚すのではないかと危惧しておりますが、何卒ご寛容下さい。

「光蔭箭の如し」とよく言われますが、私が植調協会と係わり合いを持つようになってから、既に4分の1世紀を超える歳月を経過したことになり、今更ながら、その実感をひしひしと身に感じています。昭和40年前後、私が農林水産省(勿論、当時は農林省)農林水産技術会議事務局に奉職していたとき、現会長の吉沢氏が植調協会の設立に極めて熱心に活動されており、私は設立に必要な寄附行為の原案を作成したり、民間会社が基本財産のため金を拠出した場合、その金の税法上の取扱い等の問題をめぐり、大蔵省にも足を運んだ記憶が呼び戻って来ました。

その後、農林水産省内での移動、退職のため、植調協会との直接の係わり合いから離れ、記憶も薄れていましたが、昭和59年12月に、植調協会の設立20周年記念に当り、私が当協会の発足当初、いささか関与した由をもって、身に余るお言葉と立派な記念品を頂き感激しましたが、その記念品は今でもわが家の書架の一隅を占めており、毎日眺めて昔を慕っています。

農薬が農業の生産性向上に果す役割は、今更論ずる必要はありませんが、他面、その安全性についての関心が高まり、特に最近ではゴルフ場で使用されている農薬によって、周辺の水や土壌の汚染の実態がマスコミに採り上げられることも多いのが実情です。

このような実情に対処するためにも、植調協会は、より安全な農薬の研究開発と正確な情報の提供を通じて、世間にその安全評価を浸透させるという植調協会の責務は、ますます重要性を帯びて来ています。この時代の要請を反映し、植調協会の業務内容も年々充実の一途を辿り、予算規模も設立当初、5千万円であったものが昭和63年度は15億円弱と約30倍に拡大していることは、誠に喜ばしく感ずるとともに、その蔭には、役職員全員の並々ならぬご苦勞があったものと推察しています。

一昨年、杉前会長から直接、私に植調協会の理事就任についての内々のお話があり、その後理事会で選任の運びとなりましたが、今更ながら、一寸オーバーな表現を借りるならば、運命の徒を感じざるを得ません。

私は、極めて非力ではありますが、理事に就任した以上、植調協会の益々の発展のため、役職員各位のご指導とご協力により微力を尽す覚悟でありますので何卒宜しくお願いして攬筆します。